

# 「通常学校でがんばる障害児たち」

( 1班 )

## 1. 活動先紹介

私たちは、「通常学校で頑張る障害児たち」というテーマのもと活動してきた。私たちの活動は大きく分けて3つである。1つ目は自閉症児の母である、Kさんにインタビューを行った。Kさんへのインタビューを通し、保護者が抱える多くの思いを知ることができた。Kさんは障害の理解を広める東海市キャラバン隊という、体験型の公演を行う団体の代表をしている。より、保護者の気持ちを知るため私たちは東海市キャラバン隊の公演に参加してきた。これが私の二つ目の活動である。東海市キャラバン隊の母体は、座間キャラバン隊である。発達障害・知的障害の事を正しく理解してもらうために神奈川県座間市の障害児の母親達により始められた活動をしている。座間キャラバン隊は「みんなちがってみんないい」と題して公演をしている。愛知県には、愛知キャラバン隊ネットワークがあり、東海市キャラバン隊も加盟している。現在、8つのグループがあり、それぞれ活動している。東海市キャラバン隊のメンバーもみんな障害児の母親である。東海市にもそんな活動があるといいな、という気持ちから、同じ思いの保護者が集まって活動を始めた団体である。通常東海市キャラバン隊は子ども向けに公演を行っているが、今回は通常学校で公演を行った。最後の活動は市立小学校内にある特別支援教室に見学に行った。知的と情緒と、障害の種類に分けてクラスを編成している。授業や放課、掃除の様子を見学、参加させてもらい、子どもたちの学ぶ姿を見ることができた。

## 2. 当初の活動目的や目標

私たちは講義で「通常学校に進学する障害児はほんの数パーセントしかいない。」ということを知った。それはどうしてか？少数派でありながらなぜ、通常学校に進学させたのか？そのようなさまざまな感情に知りたく、そして寄り添いたい思い、一年間活動してきた。私たちの目標は、なによりもまず「聞く」ということである。自分の意見、考えを押し付けるのではなく、相手がおしこめている思いを引き出し、耳を傾けるということを大事に活動を行った。

## 3. 自分たちの活動内容

### ①保護者へのインタビュー

Kさんのインタビューでは通常学校に進学させた理由などを、知ることができた。多くの人が通常学校に進学させることを「親のエゴ」という。しかし、Kさんの子へ対する理由は決して親のエゴではなかった。そして、そのような偏見があるからこそ、大変な思いをしてきたことを、インタビューを通して感じ取ることができた。私たちはもっと、家族を含んだ支援というものの必要性を感じた。

### ②東海キャラバン隊の公演に参加

東海市キャラバン隊の公演では、障害の正しい理解を広めるということの重大性を知った。また東海市キャラバン隊は実際に体験してもらうことによって、障害児の気持ちを知ってもらっていた。言葉だけでは伝わりにくいことも、実際に体験することによって寄り添うことができる。そのように相

手にしてもらうには工夫することが必要なのだと思います。学ぶことよりも知ることのほうがはるかに難しいことを感じた。

### ③市立小学校内の特別支援学級に見学

障害児の学ぶ姿に感動した。教員たちも特別支援学級の教室を遠ざけるのではなく、必ずみんなが通る場所に配置するなど、工夫がされていた。授業もパーテンションで仕切る、子どもたちの興味を示すものをつかって授業をするなど、環境を整えていた。しかし、福祉と教育のギャップを強く感じた。保護者と教師の連携も上手くいっていないように感じた。私たち福祉大学生には少しショックな出来事もあった。言葉を理解し、コミュニケーションもとれ、自分で動くこともできる知的障害の男の子がいた。福祉の目線でみれば、かなり自立度の高い生徒であるように思われるが、教育の目線から見れば、その子は「一人では何もできない子」に位置付けられていた。そして他にも小さなことではあるが、健常児たちとうまく遊ばずトラブルが起きる場面もあった。子どもたちへの正しい障害への理解の必要性をさらに痛感した。今日の特別支援学級内の、福祉と教育との共存の道のりの長さを感じた。

## 4. 活動における問題点・課題

活動先への連絡を早めに、そしてもっと丁寧に行うべきであった。

## 5. 結論活動を通して学んだこと、理解したこと、成長したこと

保護者の声に耳を傾ける必要性を痛感した。通常学校への進学は決して親のエゴではないことを知れた。そして「障害児の両親は努力して当たり前」といった偏見を知らず知らずに抱いていることに、気付かされた。障害児の母である前に、子の母であり、そして一人の人であること。そして人には人の人生があり、それを生きる権利があるということ。そういった当たり前のことを忘れていたことに気づかされた。障害を抱えた子どもたちを、その保護者だけにすべて背負わせるのではなく、地域で支えあい、地域で育てるという必要性を感じた。

## 6. 活動先への提案

ただ行くのではなく、何をするのか？何を学びたいのかをしっかりと考えて行動したほうがよい。

## 7. 次年度活動する学生へ

教職課程としてフィールドワークの活動を行ってきた。そこで感じたのは「自分は何にこだわりたいのか？」ということ再確認する必要があるということである。フィールドワークに行くだけでは、何も自分の力にもならない。自分がしたいこと、こだわりをしり、それに従って積極的にフィールドに出れば、必ず自分の力となって帰ってくると思う。そしてその力は、自分が教師になる際に、必ず活かされると思う。実り多い時間にするためにも、しっかりと考えたうえで、フィールドに出てほしい。